

論文の和文要旨

論文題目	中国語の可能補語〈-得了/-不了〉と〈-得/-不得〉 — 可能とモダリティ —
氏名	福田 翔

本論文は、現代中国語において、可能補語に位置付けられる〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉及び〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉について議論を行った。可能補語とは、典型的には(1)のように、「聞いた」結果、「理解できる/理解できない」となる。つまり、先行する動詞で主体の動作行為を表し、補語でその結果事態の実現性を表す。それに対して、本稿で扱う可能補語は、(2ab)のように、先行動詞及び補語全体で、「食べられる/食べられない」或いは「食べてはいけない」といった意味を表す。

(1) 听 得/不 懂 「聞いて理解できる/聞いて理解できない」

聞く-DE/-NEG-理解する

(2)a. 吃 得/不 了 「食べられる/食べられない」 / b. 吃 不 得 「食べてはいけない」

食べる-DE/-NEG-LIAO_{poten}

食べる-NEG-DE_{permi}

中国語において、可能補語は非常に発達した形式であり、様々な述語が補語として用いられる。その中で、本研究で扱った〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉及び〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉は、従来の可能補語研究の中で、特別な地位を与えられてきた。それは、両形式が、特に、文法化(grammaticalization)及びモダリティ(modality)に関わる表現であるためである。このようなことから、〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉及び〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉は、言語学的に非常に興味深い表現であると思われる。具体的には、補語として用いられている〈了: 終了する〉及び〈得: 獲得する〉は、本来「終了する」及び「獲得する」という意味を有する動詞である。それが、可能補語として用いられることで、各々の意味が漂白化(bleaching)し、単に「できる」或いは「できない」といった可能や「しては

いけない」といった不許可の意味を表す。また、両形式は、義務的モダリティ(deontic modality)や認識的モダリティ(epistemic modality)といった意味をも併せて表すことができるのである。

従来、〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉及び〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉に関する研究は、多岐に渡り、様々な観点からなされてきたと言える。しかし、両形式において、見過ごされてきた事実、或いは解決していない問題等が、まだ存在する。その要因として考えられるのは、第一に、両形式の記述及び分析が断片的にしか行われてこなかったということが挙げられよう。そこで、本研究では、両形式における体系的及び統一的な記述並びに分析を行った。

本研究では、各々の形式の意味特徴を中心とした。〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉及び〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉は、可能及びモダリティという意味範疇において、次のような意味を表すことができる。

(表 1) 〈-得了/-不了〉及び〈-得/-不得〉が表す意味特徴

意味範疇 \ 形式	〈-得了/-不了〉	〈-得/-不得〉
「可能」	状況可能	心理的不可能
「義務的モダリティ」	不必要	不許可
「認識的モダリティ」	蓋然性, 推断	—

「可能」については第二章、「義務的モダリティ」については第三章、「認識的モダリティ」については第四章で各々論じた。分析の視点及び方法は、先行述語の種類や文の構文的特徴、また文法的特徴等を明らかにすることで、各々の意味特徴との関連を論じた。また、必要に応じて、北京大学漢語言語学研究中心作成の《CCL 语料库》(CCL コーパス)から用例を収集して、それらのデータを数量的に集計することで得られた客観的データを用いて分析を行った。

まず、第二章で論じた可能の意味を表す形式と構文的或いは文法的特徴を纏めると(表 2)のようになる。可能の意味にとって、最も重要な特徴は、先行述語の意志性である。また、状況可能と心理的不可能では、前者は働きかけに言及し、後者は許容・受容に言及するという相違が重要である。両者の意味を規定すると、状況可能とは、「動作主体が意図的に動作・行為を行おうとすれば、ある一時的な条件が要因で、その事態が実現する或いは実現しないという状況にあること表す」表現であり、心理的不可能とは、「主体が対象を知覚して

いる、或いは知覚していることを仮定しており、心理的な要因で、その知覚を継続するのが難しいことを表す」表現である。

(表2) 可能を表す〈-得了/-不了〉と〈-不得〉の文法的・構文的特徴

		可能	
		〈-得了 / -不了〉	〈-不得〉
可能補語	形式	〈-得了 / -不了〉	〈-不得〉
	意味	「状況可能」	「心理的不可能」
先行述語	意味素性	意志性	意志性
		働きかけ	許容・受容
	種類	動作動詞	動作動詞の中の知覚を表す動詞
構文的特徴	有題文の義務性	非義務的	不可 (必ず無題文)
文法的特徴	義務的な要素	—	—

状況可能を表す〈-得了/-不了: -DE-LIAO_{poten} / -NEG-LIAO_{poten}〉は、無題文及び有題文の両方で成立する。それに対して心理的不可能を表す〈-不得: -NEG-DE_{poten}〉は、無題文のみでしか成立しない。

次に、第三章で論じた義務的モダリティを表す形式と文法的或いは構文的特徴を纏めると(表3)のようになる。義務的モダリティも、可能と同様、意志性を持つ先行述語を有する。しかし、義務的モダリティは、行為遂行的(performatively)表現であるという点で可能とは異なる意味範疇である。まず意味規定に関して、〈-不了: -NEG-LIAO_{necess}〉が表す不必要とは「主題に立つ要素の性質として、評言で表される事態が必要でないこと」を表し、〈-不得: -NEG-DE_{permi}〉が表す不許可とは「主題に立つ要素の性質として、評言で表される事態が許されないこと」を表す。

(表 3) 義務的モダリティを表す〈-不了〉と〈-不得〉の文法的・構文的特徴

		義務的モダリティ	
可能補語	形式	〈-不了〉	〈-不得〉
	意味	「不必要」	「不許可」
先行述語	意味素性	意志性	意志性
	種類	動作動詞の中の使用・消費を表す動詞	動作動詞 (形容詞)
構文的特徴	有題文の義務性	義務的	義務的
文法的特徴	義務的な要素	数量の目的語要素への付加	—

義務的モダリティを表す場合、〈-不了: -NEG-LIAO_{necess}〉及び〈-不得: -NEG-DE_{permi}〉は両者ともに、必ず有題文となる。また、不必要を表す〈-不了: -NEG-LIAO_{necess}〉は、必ず数量表現が目的語要素に含まれていなければならないという制限のもとでのみ成立する。

更に、第四章で論じた認識的モダリティを表す形式と文法的或いは構文的特徴を纏めると(表 4)のようになる。認識的モダリティは、形式的には〈-不了: -NEG-LIAO_{prob/deduc}〉のみが表し、非意志性を持つ先行述語を取る。また、非意志性に併せて、蓋然性の意味では非継続性を有する非継続非意志動詞、推断の意味では継続性を有する静態形容詞が先行述語として用いられる。蓋然性とは「現在話者が認識している状況を基にして、ある事態が成立する可能性或いは必然性について断定的に述べることを表すのに対して、推断とは「何らかの徴候が特定され、その徴候を基に推し量ったことを断定的に述べる」表現であり、「何らかの徴候を基にして、その帰結として事態を論理的に推論する」表現である論理的推論と、「比較対象を徴候として、それを基にして現場の状況を述べる」表現である様態に分けられる。

(表 4) 認識的モダリティを表す〈-不了〉の文法的・構文的特徴

		認識的モダリティ	
		〈-不了〉	〈-不了〉
可能補語	形式	〈-不了〉	〈-不了〉
	意味	「蓋然性」	「推断」 (論理的推論, 様態)
先行述語	意味索性	非意志性	非意志性
		非継続性	継続性
	種類	非継続非意志動詞	静態形容詞
構文的特徴	主題構造の義務性	非義務的	(義務的)
文法的特徴	義務的な要素	—	—

認識的モダリティを表す場合、蓋然性を表す〈-不了: -NEG-LIAO_{prob}〉は、無題文でも有題文でも成立する。それに対して、推断を表す〈-不了: -NEG-LIAO_{deduc}〉は、基本的には主語-述語という構文を取っていると見ることができ、併せて主題-評言であると言いたくなるような構文であるとも言える(よって表中の表記を(義務的)とした)。また推断における論理的推論及び様態は、前者は数量表現を取らないのに対して後者は数量表現を取るように文法的に特徴づけられる。

本研究では、先行研究の記述・分析を乗り越える形で、様々な議論を行ったが、紙幅の都合上、以上では、両形式が表す意味特徴と、それに伴う構文的或いは文法的特徴という観点で纏めた。

最後に、第五章及び第六章で、〈-得了/-不了: -DE-LIAO / -NEG-LIAO〉及び〈-不得: -NEG-DE〉が表す多義に対して、中心的意味の特定と、状況可能からモダリティへの意味のシフトについて論じた。

具体的には、〈-得了/-不了: -DE-LIAO / -NEG-LIAO〉は、可能(状況可能)及び認識的モダリティ(蓋然性, 推断)の両者が、中心的な意味を形成し、〈-不得: -NEG-DE〉は、義務的モダリティ(不許可)が中心的な意味用法として機能していると考えられる。更に、〈-不了: -NEG-LIAO_{prob/deduc}〉の認識的モダリティの用法、及び〈-不得: -NEG-DE_{permi}〉の義務的モダリティの用法は、両用法ともに状況可能に由来することを論じた。その結果、状況可能とモダリティの共通性を何らかの条件を含意するという特徴によって考察した。更に、認識的或いは義務的とされる意味の相違は、可能補語に現れる語の意味的特徴、〈-不得: -NEG-DE〉

が有する許容・受容という意味素性、及び通時的な用法の転換という観点から考察を試みた。

可能補語〈-得了/-不了: -DE-LIAO/-NEG-LIAO〉及び〈-得/-不得: -DE/-NEG-DE〉は、本来の動詞としての意味である〈得: 得る〉や〈了: 終了する〉といった内容語(実詞)から、機能語(虚詞)への移行した形式である。それに、モダリティ的な意味も伴い、言語学的には、文法化として捉えらえるような現象であると言えよう。しかし、中国語における機能語は、連合的(paradigmatic)な意味での、より厳密な文法化形式ではなく、本稿で考察した可能補語においては、文法的或いは構文的な特徴によって様々な意味の制限も受けていることが窺える。よって、今後、中国語にとっての機能語或いは文法化という点について、更に考察を深めていく必要がある。